メタ・レビュー

2014 年 3 月 22 日　哲学カフェ「人は何に芸術性を感じるのか？」

今回のカフェでは対話を録音したため、どのような対話の展開があったのか、あとから何度も音源を聞きなおして再考、再解釈することができました。そのおかげで、いろいろな興味深い展開（「哲学対話の質」の観点から興味深い展開）に気づくことができました。

1

冒頭で、ある参加者がひとつの仮説を早々に提出しました。曰く、「市場による『正当な』価格決定の対象たりえないものが芸術ではないか。あるいはそのようなものに人は芸術性を感じるのではないか。」ここでいう「正当な」価格決定は、その後の対話を通じて、オークションなどで行われる「恣意的な」価格決定に対比されるものであるということが明らかになっていきました。すると、これに対し、ある方が反論しました。「物の値段とはそもそも需要と供給で決まる。この絵《と言いながら壁にかかっていたゴッホの「ひまわり」のプリントを指して》のオリジナルにしても、巨額の値がついたことがあるが、それは需給の極端なアンバランスのせいで、つまり市場による『正当な』価格決定では？」そこでもとの提案者氏が「なるほど、そうか」と一旦納得すると、その後議論は違う流れに移り、この流れはここで途切れました。

哲学的な対話にはこのようなやりとりがよく生まれます。「〇〇とは何か」型の問いに対し誰かが仮説的な定義を提出すると、その仮定義に合わないながらも〇〇の一例である、あるいは、その仮定義に合いながらもとても〇〇の一例とは思えない、などと**直観的に**思える具体例、つまりその仮定義に対する**直観的反例**を持ち出してきて仮定義を論駁する、という対話の展開です。[1]　「哲学」についての私の個人的な考え方の**ひとつ**によれば、こうした展開は「哲学の起動」のためのよき足場作りとなりうるものです。ただ、この展開それ自体は足場作りにすぎず、対話がそこで終わってしまっては、哲学は生まれそこないます。（あくまで、私の考え方のひとつによれば、です。）

なぜこのような展開が哲学起動の足場作りとなるのか、といえば、それは仮定義を提出する側と反例を持ち出す側が**「〇〇とはなにか」についてすでに一定の直観的前提を暗黙のうちに共有していた**ということが、こうした展開を通じて浮き彫りになるからです。いつ共有していたかと言えば、両者が「その反例は確かに〇〇の一例である/で

[1] 正確には、前者が反例となるのは仮定義が「〇〇であること」の必要条件として理解されている場合、後者が反例となるのは、それが十分条件として理解されている場合、の話です。

はない」と直観的に合意できた時に、であり、まさにそのように合意できたというその事実によって、この暗黙前提共有が浮き彫りになるわけです。今回の例で言うと、「『ひまわり』は芸術だ」（または、「人は『ひまわり』に芸術性を感じる」）、そして「『ひまわり』オリジナルのオークションによる価格決定もまた市場原理にもとづく『正当な』ものだった」という二つの**具体的判断**について、両者は（そして対話に「ついて行っていた」もの全員が）合意できていたわけです。

私は、判断や認識に際しての人の「心」はまっさらではなく、その文脈や使われる言葉のチョイス（言語的に行われる判断・認識の場合）などによって一定の判断**原則**や認識**基準**などをいわば覚醒させている、と思います。対話においては、（直観的反例のような）**対立の中に生まれた直観的合意**は、対話者達がその合意の場面でともに覚醒させていたそれら、おそらくは**対話者達のような種類（例：同じ言語を話す）の人たちがそのような判断場面において典型的に生ずる暗黙の共有前提**に、本人達が気づく手がかりになりえます。このように、ある場面である前提に根ざした判断や認識をしていた当の本人が、その、まだ湯気のたつ判断や認識を振り返ることでその場面と前提に気づいて自覚的に掘り下げ、「今『どんな場面』で『何』が起きたのか」を言語化しようとすることこそ、真の意味での「哲学」のはじまりだと私は思います。（くどいようですが、「哲学」についてのひとつの狭量な考え方に基づき、の話です。）

なぜゴッホの「ひまわり」は芸術なのか？正確には、**なぜ私達はあの場面で「人はゴッホの『ひまわり』に芸術性を感じる」と思ったのか？**　そして、**なぜ私達はあの場面で「オークションもまた『正当な』価格決定」だと思ったのか？**（これらについて合意が生まれたあの場面は、一体**どんな場面**だったのか？）このような共同自己反省的な問いを、誰かが･･･私が･･･発すれば、また別の「よき哲学的展開」があったかもしれない。特に、普段からこのような「哲学」観をもっていた進行役＝私こそ、だれよりこの対話展開に哲学起動の一大チャンスを見つけてしかるべきでした。

サッカーに喩えるとこんな感じです：　ある参加者がパスまわしの起点として仮定義を提出。パスは次々つながり、最後に、またもとの提案者氏が、哲学起動につながりうる最高のラストパスを出す。つまり、「ひまわり」の直観的反例に氏が合意し、それをきちんとことばにしたところまで、質の高い哲学対話を生み出す足場が各発言で徐々に作られていた。しかし、これがラストパス＝哲学起動チャンスと気づき得たはず（シュートコースが見えたはず）の私は、あの場あの時、このラストパスに反応できなかった。ありえたかもしれない「哲学対話」がうまれそこなった。。

これは、「残念な対話展開過程」の一例だった、と思いました。この展開をこのように解する限りにおいて、の話ですが。

２

直観的反例は、共有されている暗黙の前提に対話者達が気づくための材料となりうるという点で、哲学起動のよき足場となり得ます。これと対照的な形のよき足場もあると思います。（引き続き、「哲学」についてのひとつの狭量な考え方によれば、です。）

哲学カフェのような対話においては、各参加者がテーマ（のことば）などに刺激されてそれぞれにさまざまな判断原則や認識基準などを暗黙のうちに覚醒させて臨むわけですが、場合によっては各自が覚醒させている暗黙前提のあいだに、対話にとって致命的な食い違いが生じることもありえます。「おなじテーマ」であっても、各参加者の個人史的背景によって、前提の覚醒の生じ方に食い違いが生まれることはいくらでもありうるからです。こうなると、対話参加者は（少なくともしばらくの間は）そのことに気づかないまま議論を空転させることとなります。このようなすれ違い議論もまた、もしすれ違っている当の参加者達自身が何かのきっかけでそのすれ違いに気づいて整理し、言語化できれば、それもまた絶好の哲学起動の足場になる、と、私は考えています。この場合、すれ違い議論に参与していた対話者達がそのことに気づくということは、結果的に、各自がその場面でそれぞれ別々に有していた暗黙前提に気づくことになるわけですから。つまり、このようにすれ違うこともまた、その後の展開次第によっては、「哲学起動のよき足場作り」だった、ということになりうる、ということです。

気づくことの結果得られる哲学的な実りがとりわけ大きいすれ違い議論もある、とも、私は考えています。前提のくい違いが、**それぞれに自明で疑い得ないような二つの直観の衝突**から来るものの場合です。「直観の衝突」というのは、**一方の直観に従えば他方を否定せざるを得なくなるような特殊な判断状況**に判断者が追い込まれることです。このような状況を「特殊」というのは、こうした衝突を生み得るふたつの自明な直観というものは、私達の通常の生活のなかではうまく棲み分けていて、ことなる文脈でそれぞれ異なる役割を果す、と考えられるからです。それらが、「哲学的」な思索や対話のなかでは、時に、同時に同じ判断に適用され、その結果その矛盾が表面化する＝二つの自明な直観が衝突する、ということです。

尚、このような直観衝突に由来する議論の対立もまた、やや特殊ながら上記のすれ違い議論の一種です。そのような対立を演じている対話参加者達は、実は各自がそれぞれ両方の直観を持っているにも拘らず、「対話」という構図に助けられて一方の直観のことを一時的に棚上げしていて、そのゆえに対立できている、というすれ違い議論です。[2]

[2] 蛇足ですが、ここでいう「直観衝突」は、カントの「二律背反」をご存知の方は、それのこととご理解いただくとわかりやすいかもしれません。また、「直観衝突に由来する議論の対立」とはつまり、二律背反が一個人の中で知覚されるのではなく、個人対個人という構図をとって外在化・表面化したもの、

今回のカフェでは、中盤以降、すれ違い議論が発生していたのではないかと、ずっと思っていました。ただ、私自身、対話の最中には「何」が起きているのかしっかり把握できず、「『芸術』という同じことばを使いながら、なにかのすれ違いが生じているのでは？」とあいまいな、そしてたぶん多くの参加者がすでに感じていたことをあえて口に出して介入するのが精一杯でした。[3]

結局私には、本当にそんなすれ違いがあったのかどうかも、また、参加者の間でその点についての合意が出来たのかどうかも、対話中にはわかりませんでしたが、録音を何度か聞き返してやっと私なりの結論が出来ました。この日の中盤以降の対話にはたしかにすれ違いがあったと思います。それも、ある直観衝突から生ずるものです。進行役の「すれ違っているかも」介入のあとは、そのまますれ違いを続ける大きな展開のなかに、（介入の成果かどうかはわかりませんが）この直観衝突のあぶり出しに寄与しうる小さな展開が各所に混ざりあいながら進んでいったように思われます。そうした「いいパス」も何本か出ていたにも拘らず、時間内に「シュート」（＝この場合は、直観衝突の発見）までにはつながらなかった。。。その意味では、時間切れとなったことが本当に悔やまれる対話でした。続けていれば、あるいは、すばらしい哲学的展開になっていたかもしれません。

念のため付け加えておきますが、私が直観衝突の発見（と断定させていただきます）にたどり着けたのも、今回の対話の録音を何度も聞きなおして考え直した結果です。今回の対話の中盤以降は、すれ違いのなかにそれについての共同自己反省のための足場作りがちりばめられた、すでに十分すばらしい哲学的展開でした。録音を何度も聞きなおした今、私はそう思っています。惜しむらくは、展開があまりに速すぎたため対話の最中には多くの参加者が（私自身を含めて）振り落とされたかもしれない。これも、進行役としては、自戒をこめて「残念だった」と言わなくてはならないと思っています。

では、今回の中盤以降の対話の背後にどんな直観衝突があったのか、というと、**「芸術」についての外在主義と内在主義**、とでも呼べるような二つの自明な直観の衝突で

とご理解いただくとわかりやすいかもしれません。（わかりやすくならなければ、この脚注は無視してください。）

[3] この介入は決して「いいパス」ではなかったかもしれません。この介入以降、対話参加者には「すれ違いの可能性を受けとめて、それを明らかにするために発言する」というスタンスと「すれ違っているかもしれないがとりあえず気にせずに、これまでどおり『芸術とは何か』について是々非々で争う発言を続ける」というスタンスの、二つの発言スタンスの選択が生まれました。しかし、どちらのスタンスから発言しているのか（あるいはどちらでもない別のスタンスからか）はっきりさせて発言するように、という指示などもなかったたため、各発言に「スタンス不明」という、それまでになかった新しい「不明瞭さ」の次元が加わり、結果、議論が「今『何』をしているか」が、かえって掴みにくくなった嫌いがあります。すれ違い議論の可能性を感じたとき進行役はどのように介入すると良いか。これは、私にとって今後の重要な検討課題です。

す。この説明をするということは、「対話の展開過程」の分析・報告の範囲を超えて、「対話の内容」の分析・報告に相当踏み込むことになりますが、しかし、踏み込まなければ「直観衝突に由来する議論対立」とだけ説明されてもそれがどのような議論展開のことをいうのか、伝わらないと思います。すでに長いレビューですが、順をおってこの直観衝突を説明します。

中盤以降の対話の主軸を形成したのは、あるひとりの参加者でした。その立場は、「芸術」というものの本質をまず

> ある種の創作技法やその評価の体系が、（時代を越えて）継承されたり（地理的に広く）伝播されたり、あるいは継承・伝播の過程を通じてかえって革新されたりする、という歴史現象

の中に見出す立場、とまとめてよいと思います。これに対し、多くの他の参加者（私自身含めて）は、振り返ってみると、「芸術」をまず、ある種の感動の経験として、またはその発露として理解する立場から出発していた、とまとめてよいと思います。ここでいう「感動の経験」とは、ひとが自分自身の内部に見出す唯一無二的な経験のことです。なので、「その発露」もやはり唯一無二的な個人の現象と理解されるものです。これらは、共有や再現を期待する対象にそもそもならず、よってはじめから継承・伝播する対象でもない、一期一会的な個人固有の現象としての「感動の経験・発露」です。

前者の立場は「芸術」の本質を公的・外在的に捉えるものです。このような立場は、よい（または高い）芸術と悪い（または低い）芸術の区別の実在と、そしてその区別を「正しく」つける「能力」の実在を直観的に認める立場でもあります。なぜなら、公的・外在的事実としての「芸術」という歴史現象は、①何かを「芸術的に評価する」という評価行為と、②誰かに「そのような評価行為を正しく行う能力を認める」＝「そのような評価行為をする資格・権威を認める」という（メタ）評価行為、これら二種類の評価行為抜きには成立しないからです。なぜそれが「芸術の良し悪し区別」の実在と「その識別能力」の実在を認める直観につながるかと言うと、これらの評価行為（メタ評価含む）がそうした行為として成立するためには、行為者（と、その行為をそうとして受け取る受け手）は、それらの実在を前提にしなければならないからです。いうならば、**これらの評価行為を行う行為者（とその行為の受け手）は、その行為（や、それを受けること）においてそれらの実在にコミットする**、ということです。「芸術」の本質を公的・外在的に捉える立場というものは、実はこのような「芸術的な評価」の行為にともなうコミットメントに由来する直観に順じようとする判断態度のことである、と私は分析します。これを、「芸術」についての外在主義、と呼ばせてもらいます。

もちろん、創作行為（作品制作もライブ・パフォーマンスも含むものとして）もまた、評価行為と並んで「芸術」という歴史現象の両輪、あるいは「卵と鶏」をなすものですが、これは外在主義の立場で言えば、主従の従のほうです。「芸術的」な創作をそうでない「ただの創作」から区別するのが評価だからです。尚、このような評価行為は言語行為とは限りません。特に、継承・伝播・革新の対象たりうるような創作の技術に関して言えば、です。ある創作行為は、それ自体が過去の「芸術的創作」技術を継承＝模倣しているならすでにその行為において過去を評価しているのであり、同様に、それが生み出したオリジナルの技術がもし未来の「芸術的創作」によって継承＝模倣されるならば未来によって評価されるのだ、と言えるから、です。

こうして、ことばによる直接的な「芸術的評価の行為」と、ある意味ではそれよりもっと直接的な継承＝模倣を通じてのそれとによって、「芸術」という歴史現象は、その他の有象無象の創作行為と評価行為をもすべて含む「歴史全体」のなかでそれ自体を差別化し、自己同定するわけです。外在主義的にいえば、です。私達の対話のなかの発言でいえば、「よい芸術は時間のスクリーニングを経て残る」のような発言は、まさに、このような評価行為に実際に「手を染める」ことから自然に生まれる外在主義的直観を反映するものです。

一方、後者の立場は、「芸術」をあくまで私的・内在的なものととらえるものです。この立場は、ありとあらゆる評価行為から独立した、内的で自律的な「感動の経験とその発露」の実在を直観的に認める立場でもあります。これは実は、**広い意味での芸術的創作の行為**に由来する直観である、と私は分析します。少なくとも、「芸術的創作の行為」の本質を、

> 評価したりされたりすること（創作行為に含まれる過去の評価や未来からの評価を含む）から生まれる歴史的な関連性と他律性からの独立性、つまり創作行為における内在的な自律性・自発性・「個」性の発露の側面

に見出してよいなら、です。その意味においての「芸術的創作の行為」はいわゆる「感動の発露」を含み、それはまさに、それに「手を染める」ことによって行為者（と行為の受け手）が内的で自律的な「感動の経験とその発露」の実在にコミットすることになるような行為である。というわけです。このような実在を自明であるとし、そこに「芸術の本質」を見出す内在主義の直観に照らせば、外在主義者が「芸術の本質」として認める芸術的評価の行為は、「芸術の本質」とはまったく無縁ということになります。（言語的にであれ、模倣・継承を通じてであれ）「過去を評価する」ことになっていようがいまいが、「未来に評価される」ことになろうがなるまいが、そんなことは「芸術の内在的・自律的本質」とは無関係なのです。

以上が内在主義の直観と外在主義の直観のあらましです。さて、もう気づかれたかもしれませんが、この二つは、二つの「哲学的」な判断場面で衝突します。具体的には、それぞれの直観が自明とみなす実在について、それを実在と認めるか否かの判断場面において、です。通常、これらの直観はそれぞれに適当な判断場面で**所与の前提としての役割**をはたすものであり、その実在性を認めるかどうか、という判断を迫られることはありません。（例：「この作品はいいかどうか」というような判断や、「この作品は真に『作者が出ている』作品かどうか」の判断の場面などをご想像ください。）しかし、一方の直観が前提にする実在が他方の直観に照らして反省されたとき、「その実在は認めるべきかどうか」という問いが浮上する「哲学的」文脈が生まれ、かつ、その実在は「反対側」の直観によって否定されるわけです。具体的に説明します。

内在主義の直観に照らして見れば、外在主義的には自明な「芸術の良し悪しの区別」と「その正しい識別能力」の実在は、ある種のフィクションというか共同幻想のようなものに見えます。「芸術の本質」を個人の唯一無二的な「感動の経験・発露」に見出すことは、「芸術の比較」を、すくなくとも客観的・実在的なものとしては、ナンセンスとしてこれを否定することにつながるからです。「世界にひとつだけの花」的直観とでもいいましょうか。。。よって、先ほど紹介した「時間のスクリーニング」発言などは、内在主義の直観に従えば、「本当は『良いから残る』のではなく、『残ったものを良いとしている』だけ」にしか聞こえません。「芸術的な評価」なるものが、普遍的とはとうてい言えないような時代的・地理的相対性をみせることも、「芸術の客観的比較」を否定する内在主義の直観を後押しします。私達の対話で出された例で言うと、ある時代のある国で「芸術」など全く意識されずに作られたものが、別の時代、別の国に運ばれて「これはいい！」と「芸術的に評価」されたりします。こうした相対性を考えると、今私達が行う「芸術的評価」も、「実在する良し悪しの区別」に基づくものと考えるのは無理があります。つまり、内在主義者は、評価者本人が「良し悪し区別」の実在にコミットして行う「芸術的な評価の行為」なるものが歴史的に実在することは認めるものの、そこでいわれる「芸術の良し悪し区別」のことは、本人のコミットメント＝直観に拘らず主観的・恣意的なものとみなすわけです。つまり、「実在する評価基準」などによるものではなく、もちろん内在的・自律的な実在として直観される「芸術の本質」にもなんら関係ない、「芸術とは無関係な類の、なにかしらの主観の発露」とみなすわけです。「良し悪し区別の実在」の直観などは、こうした発露のやりとりを行うなかから生まれる共同錯覚のようなものとして認識しながら。[4]

一方、外在主義の直観に照らして見れば、内在主義的には自明な「内的で自律的な個人の感動経験」の実在、すなわちそのような経験の「あらゆる評価行為からの独立」性の

[4]蛇足ですが、カフェの冒頭で提出された仮定義も、提案者の意図は、まさにこのような内在主義の考え方へ向けての最初のパスとしてだったかもしれません。

ほうこそが、フィクション・共同錯覚に見えます。「感動の経験」自体がすでに「評価行為」だからです。「芸術的な感動」となると、さらに言うに及びません。それはまさに「芸術的評価の行為」です。評価行為を、継承・伝播・革新のような歴史現象を織り成す織り目の一つ一つ、のようにみなし、それらの相関性と他律性のなかにそれらの本質を見出す外在主義者にしてみれば、「『芸術的感動の経験』だけはひとつの評価行為でありながらそうした評価の連鎖から独立した自律性を有する」と考えることは、矛盾になります。さきほどは、「評価の歴史的・地理的相対性」が内在主義による外在主義直観の否定を後押ししましたが、ここでは同じ相対性が逆に外在主義による内在主義直観の否定を後押しします。特に、私達の対話でも指摘された、同じ人でも同じものを何度も鑑賞しているとだんだん最初の感動が「陳腐化」してゆく、のような、個人史内部における「評価の相対性」。「感動」と「新鮮さ」の密接な関係を思うと、なにかが「新しいかどうか」ということ自体が時代、土地柄、人などに相対的な「事実」である、ということは、注意してもし足りません。もし「芸術的感動の経験」にこのような相対性を認めるなら、それは、「内的で自律的」なものではなく、本質において「外的で他律的」なもの、となります。「感動」において「何」が起こっているのか、というと、本当は、何かの歴史への参加という外在的事実なのです。外在主義的に言えば。「感動の内在性・自律性」の直観などは、こうした相対性を意識から捨象して行うものとしての「創作行為」のやりとりの中から生まれる共同錯覚、というわけです。

私の分析によれば、3 月 22 日の対話の中盤以降では、「芸術」についてのこのような二つの直観の一方だけを意識して他方を一時的に棚上げすることで生まれる二つの「人為的に純化された立場」が発生し、こうした直観衝突に由来するすれちがい議論が何度も展開されたと思います。この分析が正しいとすれば、「すれ違い続けた」と分析される限りにおいて、この対話展開もまた「残念な展開」の一例でした。ただ、そのすれ違いの正体（＝直観衝突の対話的発現であるということ）の発見・自覚を促すような共同自己観察も散見されたと思います。本来なら、この日の対話のどの部分がそのような「よき展開」（のもと）になっていたのか、具体例をあげて説明するべきですが、すでにあまりに長くなってしまったため、割愛させていただきます。このようなすれ違い議論が発生しているかもしれない、となったとき、どのような発言がその正体の発見・自覚に寄与しうるか。。。これは、拙文を読んでくださったみなさん（私を含めて）への宿題、とさせていただきます。[5]

[5] 蛇足ですが、このメタ・レビューの１と２の両方の分析は、レオナルト・ネルゾンという哲学者が提唱した「遡及的抽象」という考え方にもとづいていることを明記しておきます。正確には、それを、「直観的判断は判断者の所属する言語の構造＝生活の構造に由来する」というような考え方に基づいて再解釈したもの、です。後者のほうの考え方は、ロバート・ブランダムという哲学者の影響によるものです。